

一八八三年十一月二十八日(水)

タクール、聖ラーマクリシュナと睡蓮莊のケーシャブ・セン氏

ケーシャブの住居の前で——汝の道を行け

〔ケーシャブ、ブラサンナ、アムリタ、ウマナート、ケーシャブの母、ラカール、校長〕

カルティク黒分十四日目。キリスト暦一八八三年十一月二十八日、水曜日。この日、タクール、聖ラーマクリシュナの信者が一人、睡蓮莊の門の東側の石垣のあたりを行ったり来たりしていた。誰かを待ちあぐねているような様子である。

睡蓮莊の北にあるマンガラという家に、ブラフマ協会の会員たちが大勢泊まりこんでいる。睡蓮莊にいるケーシャブの病がこのところ非常に重くなっていた。多くの人が、今度はもう回復の望みはないのではないかと話し合っていた。

聖ラーマクリシュナはケーシャブをたいそう愛しておられるのだ！ 今日、見舞いにいらつしやることになっていた。<sup>ドブキヤシヨル</sup>南神村のカーリー神殿から来られるタクールを、この信者は、今か今かとお待ちしているのである。

睡蓮荘は環状道路の西側にある。だから時々、この信者はその道の方まで出て行つては、タクールの馬車がまだ見えないかと、向こうを眺めてくるのだった。大勢の人たちが道を行ったり来たりしていた。

道の東側にはビクトリア・カレッジがあつて、ケーシャブの協会の婦人会員や会員の娘たちが大勢ここに学んでいる。道から学校内の様子がかなりよく見える。学校の北側に、誰か身分のある英国人の家族が住んでいる広い庭のついた邸宅がある。その信者がその邸の方を眺めていたところ、この家族に何ごとか不幸なことが起こつたらしかつた。ややあつて、黒い喪服を着た馭者まじしゃと馬丁ばていが、棺桶を載せる葬儀馬車で到着した。一時間半か二時間くらいの間、いろいろと支度が整えられている。

この地上を離れて、誰かが去つて行つたのだ。だから、こういう支度をしているのだ！

その信者は物思いに沈むのだった——何処どこへ？ 肉体を捨てて何処どこへ行つてしまつたのか？

北から南の方へ向けて何台も馬車が通りすぎる。そのたびに信者は、あの御方が乗つておられるのではないかと、注意深く見つめるのだった。

時間はもう、およそ五時ころになつたらう。タクールのお乗りになつた馬車が着いた。ラトウとほか、一人、二人の信者がお伴していた。それから、校長とラカールも門から入つてきた。

ケーシャブの家の人たちはタクールをお迎えして、二階へお連れした。応接間の南側のベランダに寝椅子が一つおいてあつた。家の人たちはタクールをそこへお坐らせした。

## 聖ラーマクリシュナの三昧境——三昧状態で大実母と共に語る

タクルは長いこと坐って待っていらつしやる。もうケーシャブに会いたくて我慢ができなくおなりだ。ケーシャブの弟子たちはうやうやしく申し上げる——「先生はちよつと休んでおられますので、いま少しいたしましたら、こちらにもう間もなく見えられます」

ケーシャブは重症なのである。弟子たちや家の人たちは、どれほど気を揉んでいることか。だがタクルは、もうケーシャブに会いたくて気もそぞろになつておられる。

聖ラーマクリシュナは、ケーシャブの弟子たちにおつしやつた。

「おいおい！ 彼がこつちに来ることはないだろう？ わたしが奥に行けばいいじゃないか？」

ブラサンナが丁重に申し上げる。

「はい、あの、間もなくこちらに来られますので——」

タクル「あつちへ行け。こんな風になっているのはお前たちだろう！ わたしが奥へ行くよ！」

ブラサンナはタクルを引き止めるために、ケーシャブの話始めた。

ブラサンナ「ケーシャブ先生は別人のようになられました。あなた様がなさるように、大実母<sup>マ</sup>と対話<sup>はなし</sup>をなさるのでございます。マのおつしやることを聞いては、笑つたり泣いたりなさるのです」

ケーシャブが宇宙の大実母と対話<sup>はなし</sup>をして笑つたり泣いたりするという話をお聞きになるや否や、タクルは前三昧状態になられてしまった。そして、見る見るうちに全く三昧にお入りになった！

タクルルの入三昧！ 寒い季節なので、緑色の羊毛ウールの暖かい上衣をお召しになり、その上にまた巾ほ広い羊毛ウールの肩掛けを羽織っておられる。体は微動もせず、視線は一点に固定している。完全に三昧サマデーの海に沈み切っていらつしやるのだ！ ずいぶん長い間、この状態が続いていた。三昧はなかなか解けそうもない。

とつぷり日が暮れてしまった！ タクルルは、ほんの少し平常に戻られたようである。となりの応接間には明かりがついた。タクルルをこちらの部屋にお移ししなければと、皆、工夫をこらした。

苦心さんたん惨憺して、やっとこの御方を応接間にお移しすることができた。

部屋にはたくさんの立派な調度品がおいてある——贅沢な長椅子、ひじ掛け椅子、衣類棚、掛けガス燈、等々……。タクルルに長椅子の一つに坐っていた。だいた。

長椅子にお坐りになると再び、外界の意識を失くしたように前三昧の状態になられた。

ややあって、長椅子の上からあたりをパチパチと眺められて、酔ったような調子でおつしやつた。

「前にはこういうものも必要だった。今はもう、何の必要がある？」

（ラカールの方を見て）ラカール、お前、来てたのかい？」

〔宇宙の大実母に会って共に語る——靈的不滅 (Immortality of the soul)〕

そう言われながら、タクルルはまた何かを見ていらつしやる。そしておつしやる。

「おや、大実母ママも来ている！ また、ベナレスシルク絹のサリーなんか着て見せびらかして——。マー、そ

んな面倒なことはしないでおくれよ！ さア、静かに坐つて、坐つて！」

タクールは強い靈的興奮状態にあつた。室内はガス燈でたいそう明るかつた。ブラフマ協会の会員たちがぐるりと取り巻いている。すぐ傍にはラトウ、ラカール、校長などが坐っている。タクールはその状態のまま、独白を言つておられる——

「体（ブイハ）と魂（アイトマン）。体は生まれて、それから行つてしまふ！（魂（真我）に死はない。ちようどピンロウジュの果肉のようなものだ。果肉が熟すと殻から離れている。未熟（あおい）のうちは殻にひつついてるもんだから殻から離すのにえらい苦勞する。あの御方に会つたら——あの御方をつかんだら、自分がこの体だという感じがなくなるよ！ この体と真我（たましい）は別だとはつきり感じるよ」

ケーシヤブが入つてきた。

ケーシヤブが東側のドアから入つてきた。ブラフマ協会の会堂（タウンホール）や市民会館での彼を知っている人々は、この骨と皮にやせおとろえた姿を見て言葉も出なかつた。ケーシヤブは満足に立っていることもできないようで、壁につかまりながらヨロヨロと歩をすすめた。やつとのことで長椅子の前まできて、そこにへたりこんだ。

タクールはその間に長椅子から下りて床に坐つておられた。ケーシヤブはタクールをじつと見てから、床に額（ぬか）ずいて長いこと拝んでいた。それから頭をあげて坐つていた。タクールはまだ前三昧状態である。何かしきりに独り言（ひとりごと）を言つておられる。タクールは大実母と話しておられるのだ。

ブラフマンとシャクティは不異おなじ——人間としてのリーラー

すると、ケーシャブは精いっぱい声をはりあげて、「私は参りました。私はここに居ります」と言つて、タクルルの左手をとり、自分の手のひらでなでさすりはじめた。しかし、タクルルは神聖な愛に完全に酩酊しておられる。独白をしておられる。室内の会員信者たちは魅せられたように口をポカンとあげたまま、その言葉を聞いている。

聖ラーマクリシュナ「制限ウツクシマイのあるうちは色々様々なものを感じる。ケーシャブ、プラサンナ、アマリタといったように——。完全智が生じたら、一つの意識だけを感じる。

一つの意識で見ると、この一つの意識が生き物と世界、二十四の存在原理になつてゐることがわかる。しかし、力の現れには差異ちがひがある。あの御方があらゆるものになつてゐるのは確かだけれど、ある場所には多く、ある場所には少なく力が現れている。

ヴィディヤサーガルが、「では、神はある人には多くの力を与え、ある人には小さな力しか与えないのですか?」と言つたから、私はこう答えた。——『そうでなかつたら、一人に五十人がかかつてもかなわない場合があるのはどうしてだね? それに、お前さんのところに、どうしてわたしがワザワザ会いに来たりするのかね?』

あの御方がお遊びになる容器いれものには、特別な力が現れている。地主さまは領地のどこにでも住みなさる。けれども、たいていは決まつた部屋に坐つていなさる。信仰者は、あの御方の居間ハイムだ。信者の心

で遊ぶのがあの御方は大好きなんだ。あの御方の特別な力が現れるのは信者の心ハイトなんだ。その人の特徴しるしは？ それは、誰かが偉大な仕事をしているところ。——そこに神の特別な力が現れているんだ。

この根本造化力アディンシャクテイと至高梵パララフンは不異おなじだ。一つをのけて、もう一つを思うことはできない。輝きと宝玉のように！ 宝石をのけて宝玉の輝きを考えることはできない。また、輝きをのけて宝玉を考えるとできない。蛇うねりと蛇動うねりだ！ 蛇をのけて蛇動うねりを考えるとできない。それに、蛇のくねくねをのけて蛇を考えるとできない」

〔ブラフマ協会と人間のなかに神を見ること——修行者と成就者の違い〕

「根本造化力こそがこの生き物、世界、この二十四の存在原理になっていらつしやるのだ。下降と上昇。ラカールやナレンドラやほかの若者たちに、わたしが夢中になつていらつしやるのはどうしてだろう？ ハズラーが言うんだ。——『あんたは、あれたちに夢中になつて追っかけ廻めぐしていらつしやるが、いつ神様のことを思うんですか？』(ケーシヤブはじめ一同笑う)

そう言われてみるとその通りなので、我ながらどうしたことかと氣になつて仕様がない。だから、大実母マに聞いてみた。——『マー、どうしたんだろう？ ハズラーがなぜ、あれたちのことばかり思うのかと言います』その後でボラナートに質問した。ボラナートはこう答えた。——『(原典註)パーラタにそのことが出ています。三昧から降りてきた人はどこへ立たつていいればいいか？——サットヴァ性の信仰者のそばにいるのである』と。パーラタにそう書いてあると聞いて、わたしはすっかり安心した

よ（一同笑う）。

ハズラーのことも責められない。修行中は、これでいい、これでもない（ネーテイ、ネーテイ）とすべてを否定して、全心を神に向けなければならぬのだから——。でも、出来上がった境地では話は別でね、あの御方をつかんだ後は下がるも上がるも自由自在だ！ バターミルクからバターをとってみるとこういうことがよくわかる——バターとバターミルクは元々区別ができないものだ。そして、あの御方こそがすべてのものに成っているのだということがはつきりわかる。ある場所には強く、ある場所には弱く現れているということもね。（訳註、バターミルク——牛乳からバターを採った後の残りの牛乳）

感情の海の上げ潮が、乾いた土地一面に水をかぶせる。前には舟で海に出るのに、曲がりくねった河筋をつたって行かなければならなかった。洪水になれば、土地一面が水なんだ。そのときは、まっすぐに舟を漕げばいいんだよ。曲りくねって、ひまをかけて行く必要はない。稲の取り入れがすめば、畦道をぐるりと廻って行かなくてもいいんだよ！ まっすぐ行きたい方へ歩いていけばいい。

神をつかんだ後は、あの御方があらゆるもののなかに見える。殊に人間のなかによく現れて見える。そのなかでもサットヴァ性の人に強く現れている。つまり、女と金に全く欲のない人にね（一同沈黙）。

（原典註） バーラタ、つまり、マハーバーラタのこと。ポラナート氏は当時、カーリー殿の事務員をしていて、タクルの信者であった。そして時々、タクルのところに来ては、マハーバーラタの話をお聞かせしていた。ディーナナート氏が他界した後、彼のあとをついでカーリー殿の出納長となった。



三昧に入った人がそこから下りてくると、どこで心を休ませたいだろうか？ だから、女と金を捨てたサットヴァ性の純粋な信仰者といっしょにいる必要があるんだよ。そうでなかったら、三昧に入った人はこの世でどうしていればいいんだい？」

「ブラフマ協会と神の母性観——宇宙の大実母として」

「ブラフマンである御方が根元造化力だ。無作用のとき、あの御方をブラフマンと呼んだり、プルシヤと言ったりする。創り、保ち、壊すとき、あの御方をシャクティとかブラクリティとか呼ぶ。プルシヤ(精神男性原理)とブラクリティ(質料因、自然、女性原理)だ。プルシヤである御方がブラクリティなんだ。どちらも歓喜の権化だよ。」

プルシヤ、つまり男とはどういうものか悟っている人は、女はどういうものかよく知っている。父親を知っている人は母親をも知っている(ケーシヤブ笑う)。

暗闇を知っている人は光明ひかりも知っている。夜を知っている人は昼も知っている。幸福とはどんなものかわかっている人は不幸とはどんなものかもよくわかっている。あんな、よくわかるだろう？」  
ケーシヤブ「ハハハハハ。はい、よくわかります」

聖ラーマクリシュナ「ママー——マーとは何のことだ？ 宇宙を、世界を産む大実母のことだ。その御方が世界をお産みになって育てて下さるのだ。その御方は自分の産んだ子供たちをいつも護って下さる。そして、ダルマ(正義)、アルタ(富)、カーマ(愛)、モクシヤ(自由)——希のぞむものを何でも与え

て下さる。ほんとうの子供は、母親から離れて暮らすことはできない。母親は何もかも知っている。子供は食べたり飲んだり、遊びまわっている。いろんなことはあまり知らないし、知る必要もない」  
ケーシャブ「全くその通りですね」

昔の話——ブラフマ協会でさかんに神の栄光を讃<sup>たた</sup>えることについて

聖ラーマクリシュナはお話しをなさりながら、すっかり普通の意識状態に戻られた。ケーシャブと笑いながら会話をしていらっしゃる。部屋中の人々はひと言も聞きもらすまいと、耳をそばだててじつと見ている。一同が全く驚いたことには、この二人は、『身体の具合はどうですか?』などというよ<sup>う</sup>な言葉は全然口にしない。ただもつぱら、神についての話ばかりなのである。

聖ラーマクリシュナはケーシャブにおっしゃる——

「ブラフマ協会の人たちは、やたらに神の栄光を数えたてるが、ありやどういうワケだろう? 『オー神よ、あなたは月をお創りになりました。太陽をお創りになりました。夜空の星々をお創りになりました』なんて——。どうしてあんなことをいちいち言う必要があるのかね。たいていの人は、庭を見てはほめるだけだ。庭の持ち主に会いたがるのは何人いる? 庭がすばらしいのか? 持ち主がすばらしいのか?」

酒を飲んでいい気持ちになったら、わたしは酒屋にどれだけ酒がおいてあるか計算する必要はないんだ。わたしは一びんあればそれで十分なんだからね」

〔昔の話——ヴィシユヌ殿の宝石盗難とシエジヨさん(マトゥール氏)〕

「ナレンドラに会ったら、『お前のお父さんは何という名前だ？ 家を何軒持つてる？』なぞというようなことは全然聞く気にならない。

わかるかい？ 人間は自分の富や力を自慢に思っているから、神様も富や力を自慢したいだろうと考える。あの御方の豊かさや威力をほめそやせば、きつとお喜びになるだろと思うわけだ。シャンプーがこう言った。『私の財産を全部、神の蓮華のみ足もとに捧げきって死ぬことができますように、どうぞ私を祝福して下さいませ』と。わたしはこう答えたよ——『お前さんにとつては財産は宝で、命から二番目くらいに大事なものだろうよ。それをあの御方に捧げるって？ あの御方にとつちゃ、こんなものは皆、木ぎれ、土くれ、紙きれ同然なんだよ！』

寺のヴィシユヌ堂に泥棒が入って神像の金や宝石の飾りをごっそり盗んで行った。シエジヨさんとわたしは、神様がどんな具合になったか見に行った。シエジヨさんが、『タヨリない神様だ！ ほんとに仕様がな。お前さまの体から宝石飾りを全部もっていかれたというのに、どうすることも出来なかつたんですか！』と言ったから、わたしはあの人に言ってやったよ。——『あんた、何てことを言うんだい！ 神様の宝石飾りだ、神様の金飾りだと何度も言ってるが、あの御方にとつてはあんなものはみな、土くれと同じなんだよ！ 富の神ラクシユミーを妻として従えているあの御方に、あんたの僅かばかりの金が盗まれないように番兵していても言うのかい？ くだらんことを言いなさんな』

神様は、富や力でどうにかなるものかね？ あ、の御方は、<sup>ク</sup>信仰でどうにかなるんだよ。あの御方は何を求めていらつしやる？ 金じゃないよ。慕う気持ち、<sup>ブレイマ</sup>愛、<sup>バクテイ</sup>信仰、<sup>ツイヴェーカ</sup>識別、<sup>ウアイラーゼ</sup>離欲——こういうもの求めていらつしやるんだよ」

〔神に対する様々な拝み方——<sup>トリクナ</sup>三性を超えた信仰者〕

「人は自分の想像しているような神を見る。タマス性の信者は、大実母<sup>マ</sup>が羊を食べるものだと思つているから、いけにえに羊を捧げる。ラジャス性の信者は、いろんなカレー料理をつくつて、ご飯を炊いてお供えする。サットヴァ性の信者は、<sup>キョウキョウ</sup>仰々しいやり方で礼拝しない。彼らの祈りは他人に気づかれないほどだ。花がなければ、ビルヴァの葉とガンジスの水を供えるだけ。ムルキ<sup>ムルキ</sup>（砂糖をまぶした揚げ米）を二つまみくらいか、バタシヤ<sup>バタシヤ</sup>（砂糖菓子）を二つくらい供えれば、それでいいんだよ。たまには神様のためにパヤス<sup>パヤス</sup>（乳粥）をこしらえることもあるけどね。

それから、この三つの性格<sup>グナ</sup>を超越した信仰者がいる。その人は子供みたいなものだ。神の名をとなえることが、その人の礼拝なんだよ。ただ、あの御方の名をとなえるだけだ」

ケーシャブとの会話——神の病院で<sup>たましい</sup>靈魂の治療を

「ハツハツハ。——あんたが病氣になったのは、それだけの理由<sup>わけ</sup>があるんだよ。体のなかをたくさん<sup>たくさん</sup>の霊的な思いが通つたからさ。そういうものが通るときには何事もないうのだが、後になってから体

が傷んでくる。わたしは何度も見たよ。大きな船がガンジス河を通ったとき、別に何ともないようだった。ところが、オー神さま！ しばらくしてから土手にドボン、ドボンと凄いい音をたてて波がくだけよせてきた。あれじゃあ、きつと土手のどこかが壊れてしまったにちがいない！

小屋の中に象が入ると、内部がめちゃめちゃになつてしまふ。思ひの象が体の中に入つて——荒らして、こわしてしまふ。

どういうことになるのか、わかるかい？ 火事が起こったときは、まず家の中の品物がボーボー燃える。それから、ワアワア大さわぎになる。智慧の火は最初、色欲や怒りのような悪いものを焼き滅ぼしてしまふ。それから、我々の念いを滅ぼす。それからいま一つ、大さわぎが起こりはじめる！（訳註、死ぬ前の肉体の破壊を指す）

あんた、これで何もかもお終いだと思つているのかい！ ちがうよ。病気の痕跡でも残つているかぎりは、解放されないよ。病院の名簿にあんたの名がのつてゐる間は、出て行くことはできない。病気が完全に治らないうちは、医者先生の退院さしてくれないよ。あんた、どうして名前を書かれてしまつたんだい！（二回笑う）

ケーシヤブはこの病院の話をきいて、何度も何度も笑つてゐた。笑いをこらえきれないような様子だった。やめては、また笑い出すのだった。タクールは再びお話しになる。

〔以前のこと——タクールの病氣とラーム医師の治療〕

聖ラーマクリシュナ「(ケーシャブに向かって)フリタイがよく、こんな法悦パレウの様子は見たことがない。それに、こんな酷ひどい病氣も見たことがない、と言っていたが、昔、わたしは酷い病氣をしたんだよ。恐ろしいような腹はら下くだしだった。二百万もの蟻あみに頭をかじられているようだった。でも朝から晩まで神の話をしていた。ナタゴルのラーム医師せんしが診みにきてくれてね、わたしが坐ウツチャールって分別ウツチャールしているのを見て、せんせいは言ったつけ——『氣でも違ったのか。骨と皮ばかりになって、まだ分別ウツチャールしているのか!』

(ケーシャブに向かって)あの御方(神)の思し召しだよ。すべてはあなた(神)の思し召し。

すべては あなたの思し召し

あなたは したいようにする

あなたの仕事を あなたがするに

人は ワタシがすると言う

夜露によくあたるようにと、庭師はバラの根元を掘って土をとり除のける。露氣を吸うと木がよく育つんだよ。だから、あなたもきつと根をきれいにしてもらっているんだよ、ハハハハハ(ケーシャブも笑う)。その後で大きなことが起こるんだらうな!」(訳註、バラ——優良園芸種のバサラ・ローズ)

「ケーシャブを思つて涙するタクール——青ココナツツと砂糖をシッデーシユワリー女神に奉納」

「あんたが病気になる、わたしは居ても立つてもいられないような気分になる。この前の病気のときも、わたしは夜明け前になるといつも泣いたものさ。大実母！ ケーシャブがどうかしたら、わたしは誰と話をしたらいいんだろう、と言つてね。カルカッタへ来ると、青ココナツツと砂糖をシッデーシユワリー(訳)に供えたものだ。大実母にケーシャブの病気が治りますようにと、一生懸命に祈つたものだ」

ケーシャブに対するタクールの飾り気のない愛情と心づかいを耳にして、一同は驚いている。

「聖ラーマクリシュナ」でも、今度はそれほどでもない、正直なはなし。二、三日は気になつたけれどね」  
 先ほどケーシャブが入つてきた東側のドアから、ケーシャブの年老いた母親が入つてきた。

そのドアのそばからウマナートが聖ラーマクリシュナに向かつて、声をはりあげて申し上げた。「お母様がタクールにごあいさつしておられます」

タクールはお笑いになった。ウマナートがまた申し上げる——「お母様が、ケーシャブの病気が治るようにと言つておられます」

タクールはおっしゃる——「至福アーナンド・マイの女神様に祈りなさい。あの御方が悲しみを除けて下さいますよ」  
 そして、ケーシャブに向かつて重々しい様子でこうおっしゃつた——。

「あんまり奥の部屋にはかりない方がいいよ。女子供のなかにいると気が沈むだろう。神さまの話をしていれば気分がよくなるよ」

そして今度は、子供のように無邪気に笑つてケーシャブに向かい——「さア、手を見せてごらん」

少年のようにふざけながら手をとって、重さを計る格好をされた。——「アラ、あんたの手は軽いよ！悪人の手は重いそうだが……」（一同笑う）

ウマナートが入口のところからまた申し上げる。——「お母様が、ケーシャブを祝福して下さるよ」と言っておられます」

タクルル、聖ラーマクリシユナは、おごそかな声音でおっしゃった——。

「わたしに何ができる！あの御方が祝福して下さるだろうよ。あなたの仕事をあなたがするに、人はワタシがすると言う。」

神様は二度お笑いになる。一度目は、兄弟が土地を分けあうとき。——縄を張って、こつちの方が私のもので、あつちの方がお前のもの！神様はこう思ってお笑いになるんだ——全世界はわたしのもの。その小つぽけな場所に縄をはって、こつちは私のもので、あつちはお前のものなぞと言っている！神様はもう一度お笑いになる。息子の病気がたいそう重い。母親は泣いている。医者がきて母親に言う。「心配しなさんな、お母さん。私がよくしてあげますよ」

神が死なそうとお思いになったら、誰一人、助けることなんかできないのに、医者には知らないんだ」

（訳註）シッデーシユワリー——一八〇三年にシャンカルゴーシユがカルカタ、ターンタニヤに建立した寺院（カーリーバリ）に祀られているカーリー女神。シッデーシユワリーは、成功を与えてくれる女神の意味。シャンカルゴーシユの曾孫がスボドゥ・チャンドラ・ゴーシユで、後のスワミ・スボダーナンド。この寺院にはヴィヴェーカーナンダも何度か訪れている。



## (一同沈黙)

ちょうどそのとき、ケーシヤブは咳の発作におそわれた。なかなか止まらない。その苦しそうな音を聞いている一同は、自分たちの胸がしめつけられるようだった。長いこと苦しんでやっとおさまった。が、ケーシヤブはもうそこに坐っていることができなかった。タクールに向かつて、床に手をついて拜礼した。そしてまた、来たときと同じように壁や家具につかまりながら自分の病室に戻っていった。

## ブラフマ協会とヴェーダにある神々

〔アムリタ——ケーシヤブの長男——ダヤーンナンダ・サラスワティーのこと〕

タクール、聖ラーマクリシュナのために甘いものが用意されていた。ケーシヤブの長男がそばにきて坐った。アムリタが言った。「ケーシヤブ先生の長男でございます。何とぞ、あなた様の祝福をお与え下さいませ。どうぞ、頭をなでて祝福してやって下さいませ」

タクール、聖ラーマクリシュナは、「私は祝福なんてことはしないよ」とおっしゃった。そして笑いながら少年の体を手でなでて下さった。

アムリタ「ははははは、結構でございます。そのように体をなでてやって下さいませ」(一同笑う)

タクールは、アムリタ等ブラフマ協会の会員たちとケーシヤブのことをいろいろお話になる。

聖ラーマクリシュナ「わたしは、病気が治るようになどというようなことは、一切言えないんだよ。そういう能力を大実母にお願ひしなかつたからね。わたしはマーにいつも、清い信仰をさず

けておくれ」と祈るんだ。

あの人（ケーシャブを指す）はたいした人だよねえ。金儲け専門の人からも尊敬されるし、修行者や聖者たちからも尊敬されている。ダヤーナンダに会ったことがある。別荘に来ていたときだ。ケーシャブ・セン、ケーシャブ・セン、と言いながら部屋から出たり入ったりしていた。——「いま、ケーシャブ・センが来るんだ！」と言って——。ケーシャブ・センが、来るという約束をしたんだね。

ダヤーナンダは、「ベンガル語はガウル（北ベンガル）の言葉だ！」と言っていたよ。

あの人（ケーシャブ）は護摩供養やヴェーダの神々を認めていらつしやらないね。ダヤーナンダはそのことについてこう言っていた。——「神はこれほど数限りないものをお創りになったのに、神々には創れなかったとでも言うのだろうか」と」

そして、タクールはケーシャブの弟子たちに、ケーシャブの美点をあげて賞めてきかせるのだった。聖ラーマクリシュナ「ケーシャブは智慧の貧しい人じゃない。多くの人たちにこう言いなすつたよ。——『なんでも疑問があったら、あそこ（タクルのところ）に行つて質問しなさい』と。わたしの態度もこうだ——『あの人徳が百万倍にも増えろ』と言っている。わたしが尊敬されたって何になる？」

あの人偉い人だよ。商売人からも尊敬されるし、出家修行者からも尊敬されてる」

タクールは甘いものを少し召し上がってから馬車に乗られた。ブラフマ協会員たちは外へ出てお見送りした。

階段を下りるとき、タクールは階下<sup>した</sup>に灯火<sup>あかり</sup>が点いていないのに気付かれた。すると、アムリタたち会員に、「こんなところは、どこも明るくしておかなけりやいけなね。明るくない家は貧乏になるよ。もう二度と、こんなことにならないように——」

タクールは二、三の信者たちと共に、その夜、カーリー殿に向かつて発たれた。

## ジャイゴパール・セン氏の宅を訪問

### 家任期と聖ラーマクリシュナ

ケーシヤブを見舞った後、夜の七時ころ、タクールは馬車に同乗の何人かの信者たちと共に、マタガサ通りにあるジャイゴパールの家にお立ち寄りになった。

ところで、タクールの日常生活は、見れば見るほど信者たちを感嘆させるのだった。終日<sup>ひねもす</sup>、神の愛にひたりきっておられる。結婚式は挙げたけれども、法律上のレッキとした妻とは世間並みの生活をしていらつしやらない。その妻を敬い、拝み、妻と共にただ神の話をしたり、讃歌をうたつたり、礼拝したり、瞑想したりしておられるのだ。マヤーの世界とは一切、無関係なのである。神だけがほんとうに実在する実体であり、ほかのものはすべて実体ではないのだ、とタクールはさといらつしやるのだ。金銭は言うに及ばず、金属で出来たものには壺やお皿ですらお触りになることができな

い。女性には触れることすらお出来にならない。もし間違つて触れるようなことがあると、シンギ魚の骨が刺さつた時のように、ズキズキと痛みが走るのだつた。金銭や黄金が手にふれると、これまた手はちぢかんでしまい、急病が起こつたような様子で息を止めてしまわれる。その品物を投げ捨てるをやつと、再び元通りに呼吸をなさるのである！

信者たちは、どんなに考え思いめぐらしたことか——。世間は捨てるべきものなのだろうか？ 学校へ行つて勉強したり、仕事を覚えたりするのは何のためなのだろうか？ もし結婚しなければ、どこかに勤めなくてもいいかもしれない。でも、父や母をどうして捨てられよう？ それに自分は、もう結婚してしまつていて子供もあるからには家族を養う義務があるし——じゃあ、自分はどうすればいいのだろうか？ 自分だつて、一日中神の愛にひたつて満足してたいのだ！ タクール、聖ラーマクリシュナを眺めていると、自分はずくづく考えざるを得ない。——何をしているんだろう、自分は！ この御方は、毎日毎日絶えることなく神様のことを想い考えていらつしやるのに、自分ときたら、毎日毎日浮き世の俗事に駆けずり廻つている！ この御方に会つてるときだけが、ちょうど曇り空に一時のぞいた青空の陽光ひかりのようなものだ。自分の陥おちいつているこの人生のジレンマを、どんな格好かたちで脱け出したらいのだろうか？

この御方が自ら示して下さっているのではないか。何を今さら疑問があるというのか？

この砂の土手を壊すことが心のほんとうの希ねぞみなのだ！ 砂の土手は真実か？ 頼るべきものか？ 否——。しかし、捨てきれないのは何故だろうか？ 力が弱いからだ。もし神をあれほど愛したら、も

う何の計算も入る余地がない筈だ。ガンジス河に満潮の水が押し寄せるとき、誰がそれを防ぎ得るか。その神聖な愛に狂うほど酔った聖チャイタニヤは、腰巾こしぬれ一つきりになって他のすべてを捨てた。その愛のために、イエスは肉体を捨てて父なる愛に神のもとに昇った。その愛のために、ブツダは王位を捨てて出家にいられた。その愛がひとたび心に生え育ったならば、このはかない世間になど住んでいられようか。

そうだ、弱い人間に聖ブローマ愛など得られはしない。足を鎖でつながれて、世間から離れられずにいる人間に救われる方法すべはないのか？ そうだ、この愛すべき世捨て人、この偉大な魂のそばから決して離れてはいけないのだ。さあ、この方のおっしゃることを聴こう。

信者たちは常々、こんなふうを考えているのであった。タクールはジャイゴパールの応接間にその信者たちといっしょにお入りになった。正面にこの家の主人のジャイゴパール、および彼の親戚や隣人たちが坐っていた。隣人の一人がいろいろ質問の用意をしているようだった。この人がリーダーになって会話をすすめていった。ジャイゴパールの兄、ヴァイクンタも同席している。

〔家住期にいる人と聖ラーマクリシユナ〕

ヴァイクンタ「私共世俗の人間に、何かご助言をいただきとうございます」

聖ラーマクリシユナ「あの御方を知って、片方の手で神の蓮華の御足につかまり、もう片方の手でこの世の義務を果たしなさい」

ヴァイクンタ「先生、この世というのは、ほんとうに錯覚なのでございましょうか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方を知らない間は、この世は錯覚だよ。あの御方を忘れて、私のもの、私のもので言ってるうちは、マールヤーに縛られて女と金に夢中になり、下へ下へと沈むばかりだ。マールヤーのなかでうごめいていて、脱け出す道があるのに脱け出そうとも思わないほど無智なんだ！　こういう歌があるがね――

造化マシューヤの力のまぼろしに

われから虜とらになり果てて

この世に迷う人々は

ブラマールもヴィシシュヌもわからない

おもりを下げた網のなか

魚は群れて入りきて

出入の路はここにある

けれども魚はなぜ逃げぬ

カイコは繭まゆのなかについて

破る気あれば脱け出せる

けれどもそれにしがみつ

自ら作つた繭まゆで死ぬ

あんたら、この世がどんなに頼りなくはないものか、それぞれがよくわかっている筈だろ？  
一軒の家を見ただけでもわかる筈だよ。どれほどの人が来て去って行ったことか！ どれほどの人が  
生まれて、どれほどの人が肉体を捨てて行ったことか！ この世のことは、今あつたかと思うともう  
無くなっている！ はかないものさ！ どんなに私のモノ、私のモノと言ひ張つて頑張つていたつ  
て、ひとたび(死の床で)目をつむつたらさいご、もう無いんだよ。別に何の義務もないのに、孫がい  
るからといってカーシーへ(巡礼)行くこともしない。『孫のハルはどうなる？』とか言つて——。出  
入りの路はここにある。けれども魚はなぜ逃げぬだよ！ カイコは自分のつくつた繭まゆの中で死ぬ。  
見ろ、この世は迷いだ、錯覚だよ！

近所の人「先生、片方の手で神につかまり、もう片方の手で世間につかまる」というのはどうし  
てでしょうか？ もし、この世がはかなく無意味なものであるならば、片方の手をわざわざ伸ばして  
(世間に)つかまる必要はないと思いませんか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方を知つた上でこの世で暮らすぶんには、ちつともはかなくはないか  
らさ。まア、この歌を聞いてごらんよ——

心よ 君は耕す術すべを知れ

人間という名の未墾すゑの土地を

耕せば かぎりなく豊かに

黄金こがねなす実りを獲るだろう

カーリーの名の垣根をめぐらせば

収穫が減ることはない

その垣根は ムクタケーシーのように力強く

死の王ヤマさえ 傍そばには近づけない

ムクタケーシー——髪かみの毛を解いた者ものの  
意でドウルガー女神の別名

今日か また百年よせの後には

失ってしまうかも知れぬが

ただ今は 与えられし田畑を

ひたすらに耕しはげめよ

師からもらった種まを蒔まいて



信仰の水をゆたかに注げ

心よ もしこのことが出来ぬなら

ラームプラサードの詩に従いて行け」

### 家住期に神を覚さとる方法

「よく聞いたかい？、カーリーの名の垣根をめぐらせば、収穫が減ることはないだろう？ 神に任せればすべては成就する。あの力強い不壊の垣根のそばには、死王ヤマさえも寄りつかない。それは、それは強い垣根なんだから——。あの御方をしっかりとつかめ。そうすれば、この世は夢まぼろしだなんて感じなくなるよ。あの御方を知るということは、あの御方ご自身がすべての生き物と世界になつてゐるのを知ることだ。子供らに食べさせるのは、ゴパール(幼児の姿の神)に食べ物を捧げると同じだ。父と母は、神とその妃だと思つて仕えなさいよ。あの御方を知つてからこの世の生活をする場合は、妻と肉体関係をもたないのが普通だ。二人とも神の信者で、ただ神について話し、神とのふれあいを楽しんで暮らす。他の信者たちに奉仕する。すべての生き物、殊ことに人間のなかにあの御方がいらつしやるのがわかつてゐるから、夫婦そろつて奉仕の生活をするんだよ」

近所の人「先生、そんな夫婦は見たことも聞いたこともありません」

聖ラーマクリシュナ「あるよ、ごく稀だが——。俗っぽい連中にはそういう夫婦が見分けられない

のだ。でも、こういう生活を送るには、二人ともが良い素質を持つていることが必要だがね。二人とも神のよろこびを味わっているなら、こういう生活は必ずできる。こんな夫婦が一組できるためには、神の特別なお恵みがある。そうでなけりや、二人の間で年中イザコザが絶えないだろう。どっちかが離れて行くことになる。二人の意見が一致しなければ惨めなことになる。女房は夜昼なくこう言つてグチるだろう——『お父さんたら、どうして私をこんなところに嫁がせたのかしら！ 私も子供も満身に食べることもできない。私も子供もロクな着物も着られやしない。指輪一つだつて買つてくれやしない！ ほんとにあんたは、私を幸福にしてくれたわね！ 目をつぶつちや、神様、神様、つてばかり言つていらつしゃいますこと！ もう、もう、こんな氣違いじみたことは止めていただきたいわ！』

一信者「そういう障害が確かにございますね。それに、子供たちが言うことを聞かなかつたり……。そのほかにも邪魔がどれほどありますことか。先生、ほんとにどうしたらよろしいものでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「世俗の生活をしていながら修行するのは、實際難しいことだ。キリのないほど邪魔なことがある。今さらお前らに、あれこれ言うこともないだろう。病氣、心配事、貧乏……。それに女房とうまくいかなかつたり、子供がバカだつたり、聞き分けがなかつたり……。でも、方法はあるよ。時々静かな処へ行つて、一人であの御方に祈ることだ。あの御方をつかもうと、いつも心掛けていることだ」

近所の人「家を出なければなりませんでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「すつかり、というわけではないが——。ひまがとれたらどこか静かな処へ行って、一日でも二日でもいいから一人でいなさい——世間のことから一切関係を絶つて、誰かと世間話など決してしないようにするんだよ。そうやって独居ひとりいするか、さもなければ聖者修道の人と交わることだ」

近所の人「そういう聖者は、どうやって見分けたらよろしいでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「心と命と内なる魂をみんな神に捧げているお方が聖者だ。女と金を捨てた人が聖者だ。聖者は女の人を肉体の目で見ないで、いつも女の本質だけを見る——もし女の人のそばに行くようなことがあれば、母性はやおやとして眺めて礼拝する。聖者はいつも神を想い、神についての話だけする。そして、あらゆるものの中に神がいますことを知って奉仕する。聖者の特徴といえ、ざっとこんなものだよ」

近所の人「長い間、静かな処ひとりいに独居しなければいけないのでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「大通りの街路樹を見たかい？ 植えてまだ若いうちは、ぐるりに柵さくを廻まわしておく。そうしないと山羊や牛に食われてしまうからね。木の幹が太くなれば、もう柵はいらない。そうなれば象をつないでも折れやしない。人間も同じことだよ。心の幹が太くたくましくなれば、何の心配も恐れもないんだ。識別力が身につくように努力することだ。手に油を塗ってからカンタル(ジャックフルーツ)の実を割れば、手がベトつくことはない」

近所の人「識別とはどういうものでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「神は真実在、そのほかは皆、虚仮まぼろし——無いもの、これを分別することだ。真実在というのは永遠不滅ということだ。虚仮とはその場限りのはかないもの。識別力が身に付いた人は、神だけがほんとうに存在する実体もので、ほかは皆、本当は無いのだということがわかつている。この識別力が出来てくると、どうしても神を知りたいと思うようになる。虚仮を愛しているうちは——つまり、肉体の快樂とか、名声評判とか、金とか、こういうものを愛しているうちは、神、真理、実在そのものであるあの御方を知ろうとする気持ちが起こらない。ホンモノとニセモノを見分ける気持ちは起これば、神を探す気になる。

歌を一つお聞き——

さあ、行こう！ 私の心よ

すべての願いが叶うという

カーリー、カルパタルの樹の根元に

行つて生命いのちの四つの実を摘もう

四つの実——正義ダルマ、富アルタ、愛カーマ、自由モクシヤ

欲カマと無欲アキマの二人の妻は

無欲アキマの妻を連れて行き

グイヅエーカ  
識別シキベツ という名のその息子に  
真理の道を尋ねよう

はじめ(欲)の妻の子供らは  
遠くに離して説き伏せよう  
それでも聞き分けなときは  
智チの海原うみはらに沈めよう

浄ジヨウと不浄フジヨウの二人の妻と  
いっしょに神の部屋で寝るのはいつか  
張り合う二人が仲よくなれば  
大実母おんははシヤーマが顔を出す

善と悪 二匹の山羊やまぎは  
そこらの杭くわいに結びつけ  
それでもメーメーさわぐなら  
智慧の剣で犠牲いけにえにしてしまえ

我執<sup>エゴ</sup>の父と無知の母

おまえの家から出て行かせ

マールヤーの洞穴<sup>あな</sup>に引き込まれぬよう

忍耐の柱にすがりつけ

ブラサードは言う——このようにすれば

カーリーのもとに報告書<sup>しらせ</sup>がとどき

愛しい御方<sup>神</sup>にえらばれて

こよなき勝友<sup>とも</sup>と 呼ばれよう

心が無欲——無執着になれば識別力がでてくる。識別力ができると真理を探したくなる。すると、カーリーという全能の木の根元に行きたくなる。その木の下、つまり神のところに行けば四つの実が手に入る——簡単に摘みとれるんだよ——正義<sup>ダルマ</sup>、富<sup>アルタ</sup>、愛<sup>カイマ</sup>、自由<sup>モクシヤ</sup>。あの御方<sup>神</sup>を体得<sup>つか</sup>めば、正義<sup>ダルマ</sup>、富<sup>アルタ</sup>、愛<sup>カイマ</sup>、自由<sup>モクシヤ</sup>、それに世間で暮らすに必要なものも皆、手に入るんだよ、もし望めばね」

近所の人「でも、この世をマールヤー(仮現、幻象、迷)というのは何故でございますか？」

〔制限不二論と聖ラーマクリシュナ〕

聖ラーマクリシュナ「神を体得まないうちは、これでもない、これでもない」とすべてを捨てていかなければならない。神をつかんだ人は、あの御方こそがあらゆるものになっていらっしやるということを覚るんだよ——神様、生物、世界——一如だ。生きとし生けるものとこの世界は、あの御方以外のなものでもない。一つのベルの実を殻と果肉とタネに分ける。もし誰かに、そのベルの実の目方は？ と聞かれたら、あなたは殻もタネもとって果肉だけを計るかい？ そんなことはしないだろう。目方を計るときは殻もタネもいっしょに計るだろうさ。そして、このベルの実はいくらいくらの重さだ、と言うだろう。殻はこの世界のようなもの。人間はタネかな？ 分別しているときには、人間と世界は真我には関係ない」と言ったり、「実体のないものだ」と言ったりする。分別の途中では、果肉だけが重要で値打のあるもの。殻やタネは何の用もないもの」という風を感じる。さいごのさいごまで分別しつくすと、全部まとめ一つのものだということがわかる。そして、果肉をつくり出した精神が、殻やタネにもなっているんだとわかる。ベルの実を理解するには、この三つ全部を知る必要があるわけだ。

下降と上昇だよ。バターミルクのなかにバターがあり、バターがあるからバターミルクもある。バターミルクというものがあるならバターもあるんだ。バターというものがあるならバターミルクもあるんだよ。真我があるなら、真我でないものもあるさ。

永遠不滅のものが無常の現象世界になつている。無常の現象世界(Phenomenal world)がそのまま永

遠不滅 (Absolute) のものなんだよ。神として覚ったその御方が、人間や世界ジエツワ、ジャガットになっただけでいらつしやる。それがわかった人は、あの御方がありとあらゆるものになっただけでいらつしやるのが見えるんだよ——父、母、子供、近所の人、動物、善と悪、清浄と不浄——何もかも全部さ」

〔罪の意識と責任 (Sense of sin and responsibility)〕

近所の人「では、罪も徳 (善行) もないのですか？」

聖ラーマクリシュナ「あるさ。だが、無いんだ。あの御方が、我エゴを残しておきなざる場合は、差別感も悪行つみ・善行とくの分別も残しておきなざる。ほんの一人か二人には、我エゴというものをキレイさっぱり拭き取っておしまいになるが、そうした人たちにとっては、罪も徳も、善も悪もないんだよ。神を覚らない間は、差別の感じと善悪の分別がどうしてもあるわけだ。あんた方は、『私にとっては罪も徳も同じになった。神様がなさる通りにしているんだ』などと口では言うかも知れないが、でも内心では、それは口先だけだということがよくわかっている筈だ。悪いことをしようものなら、たちまち胸がドキドキするよ。神をさとした後でも、あの御方のご希望によって、召使いの私シを残しておおきになる。その場合は、信者は、私は召使ひ、神がご主人シと言う。そんな人たちは、神に關係した話や仕事ばかりを好んでする。不信心な連中とは付き合いたがらない。神に關係のないことには興味がない。だが、これほどの信仰者にも、あの御方は差別の感覺を残しておおきになるんだよ」

近所の人「先生は、『神を知ってこの世で生活せよ』とおっしゃいますが、あの御方を知ることが



できるでしょうか？」

〔未知と不可知 (Unknown and Unknowable)〕

聖ラーマクリシユナ「あの御方は、この肉体の感覚器官や心では知ることができないよ。世俗の欲をすっかり捨てた清浄純粹な心で知ることができるんだ」

近所の人「どんな人が神を知ることができるのでしょうか？」

聖ラーマクリシユナ「ほんとに、誰ができるんだらうねエ？ わたしたちとしては、自分に必要なだけわかればそれでいいんだよ。わたしにや、井戸の水全部は必要じゃない。一びんあれば十分すぎる。砂糖の山に一匹の蟻ンコが行った。蟻ンコにその山全部が必要だろうか？ 一粒か二粒あれば、もう、もう、ありがたすぎるくらいや」

近所の人「私どもはチフス患者のようなもので、一びんではどうも——。神の全部を知りたいと渴望しているのです！」

〔世俗——病人と薬——わたしにすべてを任せなさい〕

聖ラーマクリシユナ「それはそうだ。だが、チフスの薬もあるよ」

近所の人「先生、どんな薬ですか？」

聖ラーマクリシユナ「靈格者と交わること。あの御方の名を称え讃えること。いつも祈りを忘れぬ

こと。わたしはこう言つて祈つた——『マー、わたしは智慧シユニヤールなど欲しくない。ここにあるあんたの智慧をみんな取りあげておくれ。そして、ここにあるあんたの無智をとりあげておくれ。マー、わたしにあんたの蓮花の足に対する純粹な信仰バクティだけをさずけておくれ。そのほかのものは何にもいらぬ！』

病氣のあるところには薬もあるさ。ギーターギーターのなかであの御方はおっしゃつた。『これ、アルジュナ、わたしにすべてを任せなさい。わたしが君をあらゆる罪から解放してあげよう』と。あの御方に護つていただければ、正しい知性ブッディをさずけて下さる。あの御方が全責任をとつて下さる。どんな種類のチフスだつて退散するよ。われわれの知性や感覚であの御方がわかるものだらうかね？ —シア（リットル）の壺に、四シアの牛乳が入るものかね？ あの御方がわからせて下さらなけりや、われわれが逆立ちしたつてわかりやしないだらう？ だからいつも言つているように、あの御方に頼りきつて護つてもらえ！ あの御方のご希望通りにしていただく。あの御方は、その意思ですべてをなさる御方（イツチャマイ）なんだよ。あの御方の思し召しに逆らう力なんか、人間にあると思うかい？』